

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2015-09-16

APM news 136

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館 (旧北越銀行宮内支店)



〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233

第29回美術館大学 7月11日(土)pm3:00~pm4:30/受講者:44名

「秋山孝の神秘『メタファー』について」2 講師:秋山孝、たかだみつみ



秋山の話の中で、龍安寺(京都市)の石庭が例にあがる。区切られた敷地の中に、大小様々な石を配置して、実際にはそこには無い水の流れや山等、壮大な自然の情景を表現している。日本ではこのような表現技法を「見立て」と言う。日本の文化では至る所でこの「見立て」が使われてきた。表現したい物を他の物になぞらえて表現することである。すなわち「メタファー」なのである。世界中の多くの人がこの庭を訪れ、口を閉ざして、じーっとそれを見つめる。そこに何を見ているのか。自分の人生を見ているのだと秋山は語る。数百年たった今でも色あせることなく、また、遠い異文化の人が見ても美しいと感じる日本の美が持つ魅力は、「見立て」=「メタファー」にあるのである。

直喩と暗喩の違いは言語分野においては比較的説明しやすいが、視覚分野での説明は難しいようだ。秋山の考察では、視覚分野における直喩は、図鑑などにみる説明画がそれにあたる。その反対に位置する暗喩表現における絵画がアートとなる。しかし、説明画の中にも暗喩が垣間見える時があり、また、「メタファー」が芸術であるかというそれもまた言い切ることができない。秋山もまだはっきりと区別することができない。人々はすぐ、難しいものや理解し難いものを簡単に分かり易く説明することを求める。しかし、難しいものを理解するには膨大な時間が必要なのだ。私たちは、物事は簡単にはわからないという事を理解しなければならない。「メタファー」も然りである。また、私たちは「メタファー」を作り上げる喜びを持ちながら生きているという。過去の経験や感動により、共感が生まれ、それが「メタファー」となる。この事が、芸術を理解する一番のきっかけとなるのだと秋山は語る。

最後に受講者から、作品制作の上で自分の「メタファー」が観る側に伝わらないかもしれないと不安になることはあるかという質問に対して秋山は、「それは常にある」と答えた。そもそも、全員に伝わる方法は存在しない。だからといって、表現することをやめてはいけない。やり続けることが重要であると語った。

今回からはじまった「秋山孝の神秘」の研究であるが、全てを理解するのは容易な事ではない。だからこそ、私たちはひとつひとつ丁寧に紐解きながら研究を続けていかなければならない。その積み重ねが、真実となるはずだ。(たかだみつみ・APM学芸員/公式ホームページより抜粋)